**財布も持たずに? 2016 07 03**

**ルカ 10:1-11, 16-20 安達均**

主の恵みと平安が集まりました会衆の心の中に、豊かにしみわたりますように。

今年も独立記念日がやってくる。　7月4日というと、”Independence”、日本語では「独立」との文字が頭の中に浮かんでくる。　過去１週間あまり、アメリカで240年目の記念日を迎えるこの時期に、英国のEU脱退、つまりEUからの独立が、国民投票によって可決された事が話題になっている。　今回の、英国が巻き起こしている独立の潮流は、他の国にも影響があるのかもしれない。

しかし、アメリカ合衆国という国は、海外に天文学的な金額の債権を買ってもらっており、大借金国で、完全な独立などしていないことは自明であるし、イギリスだって、EUの脱退が、すべての経済活動が孤立するような独立ではないことも述べておきたい。　この独立という文字を覚えるとき、日本の近代化に大きな影響を与えた教育者、福沢諭吉が「独立自尊」という言葉を説いたことを思い出させる。

簡単に言うならば、「自分で自分の身を支配し､他によりすがる心を無くす事」である。親であれば、自分の子どもが「人様の迷惑にならないように、自分は自分のことをできるように独立した人間になれるように」ということは、あたりまえのように思える。　しかし、本当に一生、人様に迷惑にならずに生きていける人間はいるのだろうか。

本日与えられている福音書の内容に触れていきたい。　イエスが神の国の平和を告げる弟子たちを派遣する場面である。　その指示事項の中に、「財布も袋も履物も持っていかないように」という言葉がある。　財布も持っていかないようにとはいったいどういうことだろうか？

数週間前に、７月31日をもって引退される、ビショップフィンクのお祝い会があったが、その場で、財布をプレゼントした牧師がいた。　仲間の牧師がすかさず、「中身は入っているのか？」と質問をした。　小遣いとなる現金もなければ、もちろん一時的な借金をするクレジットカードも、入っていなかった。

なにがいいたいかというと、財布も袋も持たないとは、一文無しで派遣しており、蓄えるための手段もなければ、ましてや借金する証書などを入れるものも持たない、つまり借金手段も持たないという意味にもとれる。そして福音書ではさらに、派遣された先では、どこかの家に泊まり、そこで出される物を食べ、神の国の使者として働くものが、報酬を受けるのは当然であるとのイエスの言葉があった。

そこには、イエスの名において、神の国の平和を告げる、つまり、主イエスに徹底的に頼ることの大切さと、さらに、派遣先で、周りの人々にその日暮らしのように、お世話になるという事態となることが描かれている。　これは、冒頭に話した、独立自尊から考えからすれば、イエスの教えは、神と人とに頼って生きて行きなさいということであり、非常識のような教えに思われるかもしれない。

しかし、イエスのおっしゃりたいことは、100パーセントおんぶにだっこされて生きていきなさいということではない。本日、第二日課で与えられた、ガラテヤ書６章の言葉に次のような言葉があった。　まず二節に「互いに重荷を担うように。それがイエスの掟をまっとうすることだ。」　そして、五節には、「めいめいが自分の重荷を担うべきです。」　とある。　ちょっと、矛盾しているように思われるかもしれないが、ギリシャ語では、二節の重荷(Bsre: Burden)と五節の重荷(phortion:load) は、言葉がちがう。

二節では、一人ではとても背負うことができないような重荷を、互いに担うように。　そして、五節の重荷は、マタイ11章30節にある、「わたしのくびきは負い易く、私の荷は軽い」とイエスがおっしゃる際の、荷と同じ言葉である。　そこには、一人一人は負うことができる重荷は、しっかり負うように、書かれている。　それは、決して、すべての荷を他人に背負ってもらうのではなく、負いきれないような重荷があった場合、互いにその重荷を、主なるイエスが背負ってくださり、また主にある兄弟姉妹で担いつつ、しかし、軽くなった自分の担当すべき荷を負いながら、生きて行く指針が示されている。

4月には、わたしたちにはとても関係の深い熊本県で大地震が起こった。　3週間ほどまえには、フロリダ州オーランドでは、近年の米国内での銃撃事件では最悪、49人の犠牲者。そして先週、イスタンブールで50人もの死者を出すテロ、相次いで、バングラデッシュで、まさかの、日本人7人をも含む20人あまりの犠牲者を出すテロがおきてしまった。

理由はさまざまだが、世界中で、「まさか」と思う事件が起こっている。また、ニュースになるならないかはさておき、わたしたちの人生、さまざまな「まさか」に遭遇する。　ニュースにはならなかったと思うが、東京ルーテル教会の方々と移動中、すさまじい交通事故の現場を通った。　車が一台、完璧に横転しており、数台の事故にからんだ車や、目撃者たちと思われる車も数台止まっていた。「まさか」の渦中にある人々、そして周囲の家族、知人たちは、いわばショック状態に陥り、いつまでかはわからないが、精神的・肉体的な重荷を背負うことになる。

東京ルーテル教会の兄弟姉妹が23日から一昨日までステファンミニストリーのトレーニングを行なっていた。　　その中で学んだことは、とくにショックな出来事、まさかと思うような事態に遭遇した後、とかく自分の力でなんとかしようとすると、悲しみ、不安定な状態がどうどうめぐりになる、ということを学んだ。

いったい、いつまで、その痛み、重荷から解放されるのであろうか？　隣人の思いやり、また、主イエスの慈しみ、憐れみに、癒し、慰めを祈る。　決して、すべてを自分で行なおうとする独立ということではなく、互いに頼りながら、そして、主に信頼するなかで、負うことができる範囲内の、荷を担って、ひとりひとりが歩めますように。　わたしたちの人生、いつどこでなにが起こるかわからない。　まさかにそなえ、地球上に住む人類が、ひとりひとりが、たがいに思いあって、頼りあう、独立記念日を覚えたい。